

# 井伏さんを憶う

古山 登

井伏（鱒二）さんが、七月十日午前十一時四十分、入院先の東京衛生病院で九十五年の生涯を閉じられた。そして翌十一日、病院の敷地内に併存する教会で、訃報に接して駆けつけた人々だけで前夜祭（通夜）、さらに次の日の十二日、同所で密葬が取り行われ、御遺体は荼毘に付された。その間、一般通夜・本葬に関する報道は全く無く、本葬を行わないことが決まったのは密葬の二日後の十四日であった。だから、あれだけの人のこと本葬が無いなんて思いもよらず一般通夜か本葬でお別れをと考えていた多くの人たちは完全にはぐらかされた形になってしまった。お元氣なら当然喪主であるべき節代夫人が入院・術後療養中ということがあってのことで井伏さんが仕組んでのことではないだろうが、息を引き取られてから荼毘に付されて骨になるまで、遺体が病院・教会から程近い自宅に帰ることの無かったことと合わせて、いかにも井伏さんらしいと生前親しく出入りさせていただいていた者たちは語り合った。

井伏さんは、少年時代から若し将来文学に関係する職業に就いたら会ってみたいと思っていた作家であった。そう思うようになったのは、井伏さんが『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』等毎日新聞系

の新聞に連載（昭和17・8・17〜同10・7）した「花の町」（昭和18文藝春秋社）を読んだことに始まる。当時私はまだ十六歳の中学生（旧制）だったが、この新聞小説が無性に面白く、私は毎朝この小説を読んでから登校した。新聞の配達が遅れたために登校時間がずれて朝礼に遅刻し、遅刻理由が戦時下の学徒にあるまじき所行としてクラス担任から体罰を受けたこともあった。何がどう面白かったのかと聞かれても今となっては答えに窮するが、作品自体の小説的面白さは別として、舞台は日本軍占領下のマニラでありながら少しも「戦時色」を感じさせない独得の爽やかさに魅かれたのではなかったかと思う。

編集者になって最初に訪問した作家も井伏さんだった。

それは昭和二十五年五月初旬の雨上りの午後だった。今は門を入れて玄関を通らなければ井伏さんの居間に入れないが、あの頃は門を入ると直ぐ小さな枝折戸があり、そこから居間の縁側が見渡せたもので、私たちはいつも枝折戸を開け幾つかの敷石を踏んで居間に直行した。尤もその習わしは、当日、枝折戸を出て来る一人の婦人記者とすれ違ったことから知ったことで、その婦人記者は花柄のワ

ンピース、中ヒールのパンプスを履いて背筋をしゃんと伸ばしバラソルをさしていた。そして、井伏さんは縁側に立って雨上りの青空を眺めていたが、初対面の私が挨拶をする前に、「君、女記者って偉いもんだ。今行った女記者がこの敷石に滑って尻餅をついたんだがバラソルは立てたまなんだ。そのまま立ち上って後も振り向かずに行ってしまったよ、偉いもんだねえ」

と云ってくすりと笑った。

相手は私とは三十歳近くも年上の大家、而も初対面とあって緊張気味であった私はこの一言ですつと肩の力も抜け、仕事部屋でもあった居間に上り込み、絶妙といわれる井伏さんの話術に酔いしれ、その上翌月号への短編小説執筆依頼の承諾を得て、意気揚々と編集部へ戻ったのであった。

然し、編集部は私の報告を信用しようとしなかった。井伏鱒二といえど、ヴェテラン編集者でも依頼して現実に原稿を受け取るまでには早くも三か月はかかるというのがこの世界での常識であったから、編集部のごうした反応は当然だったろう。編集長なども「ま、新年号に間に合えばいいだろう」と云って私の意気込みを軽くないなし、私をむっとさせたものだ。一方、むっとした私は意地にも月末には井伏さんの好短編を手にしてみせるぞと一層入れ込んだ。そして締切が近付くにつれて清水町（井伏さんのことを、お住まいのある杉並区清水町の地名から取ってこう呼んでいた）に日参、締切日を過ぎてからは夜討ち朝駆け、遂に「物売り二題」と題する十六枚の随筆を頂戴した。内容はお願ひした短編小説が随筆に変わってしまったが、この原稿は小説並に扱われ、「改造」昭和二十五年七月号の誌面を飾り、先輩編集者たちの私を見る目を変えさせた。

以来、「改造」が休（廃）刊する昭和三十年まで、私は井伏さんのお宅に繁々と出入りするようになり、昭和26「パイプについて」同27「再会」同28「ある高校生」同29「散歩の友」と何れも小品ながら味わい深い好短編を一年に一作は必ず寄稿して頂いた。

そして、清水町詣では「改造」廃刊後もつづく。「文藝春秋」や『中央公論』や『新潮』などの総合雑誌、文藝雑誌の現役編集者と同席する場合もしばしばだった。そんな時、原稿取りという仕事を失った私は気後れのようなものを感じることもあったが、井伏さんは仕事に関係あろうがなからうが態度は全く変わらなかった。

井伏さんのお宅では挨拶が済むと直ぐ酒になる。肴は節代夫人の手料理。日本橋の大きな老舗の長女として育ったと伝えられる節代夫人の手料理はさすが大店の総領娘を思わせる腕前で、食材には必ず旬しゅんの物を使い、盛りつけも小綺麗で酒のつまみとして絶好であった。そして井伏さんの座談。井伏さんの座談の面白さは先頃出版された『井伏鱒二対談集』（新潮社）などでも明らかのように、話題は多彩、話術は飄々として味わい深く、活字にすればそのまま随筆か好短編として通用するような、聞く者にいつまでも飽きを感じさせない絶品であった。

ただ一つ困ったことは、酒はウィスキーかブランデーが多かったが、一瓶空になるまで席を立てないことだった。相客が居る時はそれ程でもなかったが、差して飲んでいる時は、二人で一本飲み干すことは酒が嫌いではない私にもかなりハードなことと、それに酔いが回るにつれて井伏さんの存在感そのものから来る一種の威圧感にじわじわと締めつけられ、また井伏さんという人は外面的には飄々として大まかなようで神経は細やか、傲慢さや小賢しさには厳しい

上に鋭い洞察力の持主だったから、こちらも結構緊張しつ放して話  
しに興じながら疲れたものだった。

こんなことがあった。

昭和五十年七月のことである。私は高級スコッチウイスキーの  
ウィングを手土産に若い友人と二人で井伏さん宅を訪れた。そして  
いつも通り早速氷やミネラルウォーターなど「酒」が準備された。  
このスコッチは、ボトルの底が平坦でなくちようど起上小法師のよ  
うな工合になっていて、指で突つくとゆらゆら揺れる。前に同じス  
コッチをお持ちした時、このボトルが気に入られたらしく何度も楽  
し気に指で突つかれた。味もお気に召したようであった。そのこと  
を覚えていたので、若い編集者の友人を井伏さんに紹介するに当り  
思い切つて奮発してこの高いウイスキーを持参したのであった。

ところが井伏さんは手を拍つて節代夫人と呼ばれると、いきなり  
こう云つたのだ。

「古山君に麦茶を持って来てくれ」

「え」と訝る奥さんと私と若い友人。

井伏さんは言葉をつづけた。「古山君の会社の偉い人から『古山  
は身体を壊しているから酒は飲まさないでくれ』って頼まれてるん  
だ」

(そんな馬鹿な!) 私と若い友人は顔を見合わせた。私の勤め先の  
集英社の「偉い人」に井伏さんとお付合いのある人物は居ない。若  
し「偉い人」に該当する人物が居るとしたら親会社の小学館の社長  
だけだ。その社長にしても、文学賞授賞記念パーティーとか出版記  
念祝賀会の会場などで通り一遍の挨拶を交わす程度で、とてもたか  
が一社員の健康管理を「頼む」間柄ではない筈だ。だが、その「偉

い人」って誰のことですか、と私が尋ねても井伏さんは「名前は云  
えない」と云うばかりで平然と奥さんの手料理を突つき、ウイスキ  
ーを飲み、談笑の合間にスウィングの瓶を指先でちよつと突つきゆ  
らゆら揺らしている。若い友人は、私に対して申し訳無さそうに時  
折目をくれながら、やはりつまみに手を延ばしては旨そうにウイスキ  
ーを飲んでいゝる。そして私は……節代夫人心尽くしの肴を頂戴し  
ながら専ら麦茶を飲んだ。

その夜、私と若い友人は、井伏家を辞した後梯子酒をして飲みま  
くつた。そして、それから三週間後、私の胃に潰瘍のあることが分  
り、胃を五分の四切除した。

井伏さんのことは思い起こすときりがない。初めてお会いしたの  
は先述の通り昭和二十五年のことだから、あれからもう四十三年に  
なる。その間、いろいろとあつた。初めて清水町を訪れた時のこと  
井伏さんと云えば必ず酒と釣りが、締切り日になって行方が知れ  
なくなり、玄関前で待っていたら夜になって釣り姿で戻つてこられ、  
釣果の岩魚をご自分で七輪に火を起こして焼ぎ御馳走になつたこと。  
お供をして阿佐ヶ谷や新宿を飲み回つた時。そんな時は殆どいつも  
ハンチングに和服の着流しで、一時代前の「文士」の風俗そのもの  
であつた。おかしかったのは日本近代文学館が確か『文學界』であ  
つたと思うが、復刻版の発行を計画した時のことだ。文学館ではそ  
の復刻版発行について執筆者全員に承諾を求め、井伏さんを除く全  
員から承諾の返事があつたが、井伏さんからは返事が無い。そこで  
「何とか承諾を取つてくれ」と文学館の有力理事でこの企画の推進  
者でもある敵谷大四さんから私は頼まれたのである。敵谷さんとい

えば、井伏さんと同じ荻窪地区内の住人であり、お互い戦前からの知己だったのだから自分で交渉すればよいものをわざわざ後輩の私に頼んで来たというのは、井伏さんの気質を知っているだけに余程自信が無かったのだろう。井伏さんは元々近代文学館というものを余り評価していなかったし、名著復刻にしても表向きは大層立派な事業であるけれども実は資金集めの手段と認識していたから、事業なら事業で構わないけれども、余人はともかく自分は関りたくないというようなところだったようだ。と云って正面切って拒否するのは大人気ないし、正式に受諾するのは志に反する……ということでは返事を留保していたのだった。

それでも井伏さんは私の話に耳を傾けてくれた。そして私が話し終ると「ちょっと考えごとをしていたので君の云うことをよく聞いていなかった。君の好いようにしてくれ」と空惚けられた。おかげで私は使命を果たすことが出来て男を上げたが、以後、私は井伏さんにこの種の難かしいお願いをする時は、いつも「先生、ちょっと考えごとをして下さい」と云うことにした。

仕事の面では、私は、あれだけ繁々と出入りしているながら、「改造」廃刊後は二十余年間に『井伏鱒二自選集』一卷だけしか作っていない。この本は五百部限定、帙入り・草装・天金というかなり贅沢な豪華版であったが、造本打合せの折に示された井伏さんの造本や用紙についての該博な知識と秀れた色彩センスには舌を巻いたものだった。

造本ばかりでなく、井伏さんの知識は実に該博だった。魚の種類や生態に就いては勿論、樹木・花卉・野草・野鳥や昆虫、貝や茸類

に就いて、古典やロシア文学から能・歌舞伎・新劇・落語のこと、政治や経済などには余り関心が無いように見えたが、その知識の広さ深さにはただただ恐れ入るばかりであった。

また、趣味も、井伏さんと云えば直ぐに酒と釣りというふう云われるが、そればかりではなかった。書画や焼き物（井伏さんは作家になる前は日本画家を志し、橋本閔雪の門を敵いたり日本美術学校別科に通ったりしている）の鑑識眼は一流で、篆刻は自ら良くし、将棋の腕前もなかなかのものであったと伝えられている。井伏さんの話題の多彩さの一因はこんなところにもあったのだろう。

また、井伏さんは付き合いの良い人で、名利に関係のない会合には小まめに姿を現した。しかし、出版社などからの差廻しの車は一切断りいつも電車とタクシーを利用し、お開き後は親しい友人、編集者たちと銀座は避けて新宿、大久保、阿佐ヶ谷、荻窪辺りの昔馴染みの店で二次会、三次会を遅くまで楽しんだ。井伏さんが友人たちの消息に通じていた秘密はこんなところにもあったと思われる。こうして四十余年、誠実、相互信頼、寛容、真贋の見極め等々、いかに生きべきかに就いて私は井伏さんから多くのものを頂いたと思っている。

その他、私には井伏さんから頂いた宝物が二つある。

一つは、昭和五十五年、私が編集者を辞めて神奈川近代文学館の建設に携わることになった時、冠婚葬祭の名人と云われた榎本昌治氏（講談社・平5・5・28没）が中心になって「古山登君を励ます会」というのを催してくれたが、井上靖、源氏鶏太、佐藤朔、丹羽文雄、山本健吉の諸氏と一緒に井伏さんもその会の発起人に名を連

ねて下すたのであった。豪華な発起人の顔触れのおかげで会は出席者が三百名を超える盛会となった。そして、その折、井伏さんは記念に詩「紙風」〔厄除け詩集〕を記した色紙を下すつた上に、当日は開会前から最後までずーっと居ていただいた。編集者と云えば有名作家の色紙の一枚や二枚簡単に入手できるように世間では思っているようだが、実は逆に編集者という立場は却って作家に色紙などお強請りできないのである。況して滅多に揮毫などしない井伏さんの色紙とあれば、正に貴重品であった。

もう一つは、旅先の岡山県牛窓町から頂いた手紙である。

文面は、

「前略

去年の暮から旅に出てゐます。新年には折角のところ失礼したことがわかりました。にぎり酒（年賀に持参―筆者）は今月末に帰宅してからゆっくり頂きます。

昨日、水島の油で汚染された魚（前年に瀬戸内・水島辺で石油タンカーが事故を起こし油が大量に流出した―筆者）の試食会が当地の旅館で開かれました。僕は窓の外から覗いて見たのです。六十人ほどの男女が何種類かの魚を食べくらべてゐるわけで、みんな思慮深いやうな顔つきで、ゆっくり箸をつかひ、静かに皿を置くのです。実に上品に見えました。乙姫様主催の宴席のやうでもあり、尻っぱり腰で食っているやうにも見えませんでした。

今から後は、油を流したやうな海といふ成語を僕は使はないことにします。魚や貝や海苔だけでなく海辺の鳥も閉口しているやうです。磯の微細な虫しか食はないと云はれているイソヒヨドリが、先日の朝早く大挙して宿屋の前のクスの木の実を一心に食っ

てゐるのを見ました。翼がなければみんな死ぬところだったと思ひます。

僕はもうちょっとここにゐて、天氣がよくなったら伊部焼の伊部町に移るつもりです。あそこは日本で一番古い焼物の町で、最近まで汽車が来てなかつたので何か良いものが見つかるでせう。つまり備前焼を安く買ひたいのです。

お元気で。 不一

二月一日

古山登様

井伏鱒二

というもので、一通の手紙ながら文体はまるで井伏さんの短編や隨筆、「乙姫様主催の宴席」というような発想は井伏さんならではものど云っていいだろう。また、町の有力者たちが、一方ではどうか魚が汚染されていないようにと願ひ、同時にこんな物食べても大丈夫なのだろうかと惧れながら、おっかなびっくり魚に恐る恐る箸を着けている様子がありありと描かれていて、「高校野球は窓から観るのが一番面白いね」とかつて井伏さんがおっしゃっていたのを、ふっと思い出した。

私は、この手紙と色紙を篋底深く蔵して大切に保存して居り、この二品を通じていつでも井伏さんと対面できるように思っているが、今、悔まれてならないのは、これだけいろいろのものを頂きながらこの数年来一度も清水町に伺うことがなかつたことだ。

それでも、編集者を辞めて暫くは、先述の通り私を「励ます会」に出席して下さつたりいろいろな会合でお目にかかる機会もちょくちょくあつたのだが、茅ヶ崎キャンパスと自宅の間を往復すること

が殆ど毎日の生活になってから、毎年「御無沙汰して居りますが、今年には是非同往せて頂きます」と年賀状には必ず書き添えたものだったが、とうとう訪問することはしないままに終わったのだ。会合でお会いすることも無くなった。私自身、学校以外に出掛けることが年々億却になって来て、出掛けると云っても藤沢か鎌倉、せいぜいが横浜止まりで、東京に出るのは月に一度の通院以外私用では二た月か三月に一度程度になっていて、そんな都合だったから東京での会合に出席することはめっきり減っていたし、井伏さんの姿を会合の席で見かけることも無くなっていた。前夜祭の後、井伏さんが最眞にしていた荻窪の小料理屋に安岡章太郎氏、三浦哲郎氏など生前井伏さんに可愛がって頂いていた十人許りが集り、その席で、井伏さんは近年脚が弱っていて殆ど外出もされなくなっていたと聞いたが、私はそれまで迂闊にもそのことを知らずにいたのだ。そして、そのことが改めて悔まれた。不精せずにお元氣なうちにスウィングを一本提げてお伺いするのだった。

以上、井伏さんのことを思いつくままにだらだらと書き連らねて来たが、井伏鱒二と云えば、プロレタリア文学と横光利一、川端康成が代表する新感覺派の妻まじい相剋の渦中であって自己を守りつづけ、戦時中も決して時流に屈せず悠然と生き抜き、直木賞（昭和12受賞作『ジョン万次郎漂流記』）をはじめ第一回読売文学賞（昭和25『本日休診』）等数々の文学賞を受賞した他、芸術院会員、文化勲章受章と輝かしい足跡を残し、特に第十九回野間文芸賞を受けた『黒い雨』（昭和41）は多くの文芸評論家・読書人によって「戦後日本で生んだ最高傑作」と称賛され国際的にもノーベル文学賞に擬せら

れた昭和文学を代表する作家であることは論を俟たない所だが、ここでは敢えてその面に触れることを避けた。個々の作品に就いては既にかなり充分に評価されていることだし、「昭和文学の巨人」としての日本近代文学史上での位置付けは今後多くの研究者・文学史家によって行われるだろうからである。

また、井伏さんの勁さ、厳しき、可怕こわさの記述も割愛したが、これは、その本体を探ることは井伏文学の本質に迫ることで容易ではないので他日に譲った次第である。

最後に、名訳として知られる「勸酒」一編を掲げて、この稿を終わりたい。

#### 勸酒 干 武陵

（原詩）勸酒金屈卮／滿酌不須辭／花發多風雨／人生足別離  
（対訳） 前野直彬

君にすすめる黄金のさかずき、／なみなみとついだこの酒を辞退などするものではないよ。／この世の中は、花が咲けば、とかく雨風が多いもの、／人が生きてゆくうちには、別離ばかりが多いものだ。／「さあ、くよくよせずに飲みほしたまえ。」

#### （井伏鱒二訳）（『厄除け詩集』）

コノサカヅキヲ受ケテクレ／ドウゾナミニナミツガシテオクレ／ハナニアラシノタトヘモアルゾ／「サヨナラ」ダケガ人生ダ

#### （付記）

井伏さんの逝去に就いては、主要新聞各紙共一面で大きく報じ追悼記事を掲載、『新潮』『群像』『文學界』『海燕』の文芸四誌はいずれもそれぞれ九月号で特集を組み、井伏さんを追悼している。